

## 【サクラサク】

残念ながら……。そこまで読んで、ブラウザを閉じてしまった。しばらくギュッと目をつぶってから、部屋の窓の外を覗くと小さな花はまだ蕾で、そのまま永遠に咲かなければいいと思った。

今の時代、受験生にサクラチルの電報は来ない。たいていは風情も何もないインターネットの表示で大学の合否を知る。無味無臭に確定されてなを、つるつると生きていく。

そんな受験生の世界は限りなく一元的で、若いのにさわやかでない。それは、ぐるぐると攪拌された泥水のように、直前の学生時代に反比例して暗く不透明だ。加速していくそのぐるぐるに、結果、一部は沈殿していく。

それは数年前の冬で、僕は受験生で、とりあえずそれ以外の未来はみえていなかった。

親と祖父母に電話した。受話器に膜が張っているように声は遠くから聞こえる。電話を切ってから片耳を押えて「アーアー」とはじめて、自分の耳がおかしいのだと気がついた。「まいったなぁ」頭はそんな感覚だったけど、体はちょっとした弾みにガクガクと震えた。逃げるように家を出る。足は無意識に新宿の末広亭へ向かっていた。

寄席に入り、隅の席につく。見習いの落語、大道芸、漫談、奇術、都都逸。いつもどおり末広亭はガラガラで、それに対する居心地の悪さはもう感じないようになっていた。そんな平日の中入り前に、ヨタヨタの老噺家さんが出て来た。やっと何とか、といった感じで座に着くとお茶を一口だけすすって、こう話し始めた。

噺家をしていてよかったと思う瞬間は、お客様に「落語を聞くと気がこう、スーッと楽になる」と言っていた時です。本当にまあしみじみ、ありがたいなぁと思うわけで。というのも、落語には弱いもんが出てきます。や、そんなもんしか出てきやしません。弱きをくじき、強きにへつらい、三道楽におぼれる。人間そのものですな。それでも、彼らはみーんな生きてる。泣き、怒り、哀しみ、笑い、そうして生きている。落語の芯はつまりまァ、『人間はそれでも、生きてりゃいいんだ』というところにあるんで……。

唐突に、頬を流れていく涙に気がついた。それはそのまま止まらなくて恥ずかしくなり、僕はうつ向いて顔を覆った。

受け入れられない現実とそれでも薄々感じていた諦め、それに対する恥ずかしい気持ち、両親に対する申し訳なさや自分の情けなさ、やり場のない悔しさ。とにかく皮膚の下にザワついていた、目を反らさずにいられなかった感情を全て見透かされて、見つめられて、その上で許されたような気がしたのだと思う。感情があふれて涙になり、落語を無性に優しく感じた。

中入りで寄席を出てから新宿御苑へ行った。

キンと冷えた公園の隅で、冬咲きのさくらがひっそりと咲いているのを見た時、僕はもう一度だけ泣いて、それからゆっくり歩き出した。